

2018 年度立命館附属校・提携校 英語科公開授業研究会

附属校教育研究・研修センター

8月23日(木)立命館慶祥中学校・高等学校で、英語科の公開授業研究会が開催された。中学校の授業では高校生が中学生を指導する取り組みを、高校の授業では前半のインプットの活動から後半はインタビュー活動を行い学習の定着を図る学習活動を公開いただいた。他校からの参加者は少なかったが、たくさんの方を学ばせていただける公開授業であった。

参加者は、立命館1人(長岡京)、立命館宇治2人、当該立命館慶祥から授業担当者を含めて15人の合計18人であった。

次に内容を報告する。

(1) 研究授業

- ①テーマ「主体的に言語活動に取り組む工夫」
- ②テーマ設定理由：高等学校学習指導要領の改訂のポイントとして挙げられている「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を念頭に、立命館慶祥の学習環境で何が出来るのかを検証する。
- ③研究授業概略

研究授業 I	中学1年生 高校2年生 英語/スピーチ	教材：Media Center Library 授業者：アンディ・クネーブル先生
研究授業 II	高校1年生 コミュ英 I	教材：New Treasure 4 Lesson 3 Different Styles of Encouragement 授業者：中川 淳 先生

④授業のねらい

「研究授業 I」：時間割の枠組みを超え同一時間内で高校2年生が中学1年生に英語を教える。リラックスした雰囲気の中で英語の学習経験を構築するような生徒主導型の授業。高校生は下級生を教えることによって自らの英語運用能力の向上を図り、中学生は5年後の自分の英語学習における理想の姿を上級生の中に見出すことによって学習への動機付けを強化する。

「研究授業 II」：日常生活と関連付けられた授業は生徒の興味と教材への理解を増す。50分の授業内で教科書の限定された内容から徐々に本物のコミュニケーション活動へと発展させていく。前半は語彙練習・表現筆写・読解・音読という受動的なインプット活動に取り組み、後半はアウトプット活動としてグループ毎にインタビュー活動を行い学習事項の定着を図る。

⑤授業内容

「研究授業 I」：授業に先駆けて、担当教員が授業会場であるメディアセンターのテーブルの上にペアの数だけ様々なタイトルのグレイデッド・リーダーズ(簡単な英語の読み物)を事前準備として置く。高校生は前もって座席と本を指定されており、中学生は会場にやってきてからランダムにパートナーの高校生を選んで、各テーブルに2組ずつ着席する。授業の冒頭、担当教員より簡単に本日の授業の流れの説明と確



認があり、まずそれぞれのテーブルで各ペアの高校生と中学生がお互いに自己紹介する。次にそれぞれのペアに割り当てられた読み物を高校生が中学生に対して音読する。単なる機械的な棒読みではなく内容（意味）に応じたジェスチャーを交え感情を混めて読む。読了後、高校生がそれぞれの本に関して英語でコメントを述べる。中学生はその内容を英語でハンドアウトに記入する。最後に一部のペアを指定して学習した内容について全体にレポートバックさせて、学習内容をクラス全体で共有する。

「研究授業Ⅱ」：ウォーミングアップとしてコーラスで発音練習を行い、フルエンシーMCのYou Tube 動画を用いて s と s h の発音の違いを注意しながらラップソングを歌う。次に教科書の新出単語をパワーポイントで練習する。英語→日本語、日本語→英語、ビジュアルイメージ→英語と3周練習する。続いて本時の教科書本文の音声教材を用いてリスニング活動。生徒たちはランダムにハンドアウト上に与えられた日本語の語句に対応する英語の単語やフレーズを聴き取って正しい順番に番号をふる。その後、本時の教科書本文を教科書のページを見ながら一度聴き、内容理解の鍵となる英文をハンドアウトに書き取らせる。各文を確認してから教員の後に続いて反復練習、続いて教科書準拠音声教材を用いてシャドウイング。ここまでで35分。インプット活動が終了。教科書の内容が子供のほめ方についての日本人の大人とアメリカ人の大人の違いについてであったので、授業を見学していた先生方（ネイティブ教員を含む）の元へ6つのグループに分かれた生徒たちが赴き、英語でインタビューを行う。最後に各先生に前もって渡してあった前日の単語テストの返却をポジティブなコメントとともに行ってもらい、生徒たちはそのコメントと自分の印象をハンドアウトに英語で記録する。



(2) 合評会

附属校から参加された先生方の質問に対する回答としてまとめた。

「研究授業Ⅰ」:

クネーブル「教員によるワンウェイの講義型の授業よりも、上級生が下級生に教えるという形態の方が生徒たちにとっても得るものが多い。時間割や教室の関係で定期的にこのような授業を展開するのは無理だが、年に数回でも実施できればよいと考えている」

中川「上級生が下級生に教えるという形態を取ることで、前者は後者に対する責任を意識することができ、後者は前者の中に英語学習に対する理想形を見出すなど、単に英語だけではなく社会性のようなものを学ぶことができるのでとてもよい」

「研究授業Ⅱ」:

中川「高校1年生のコミュニケーション英語の授業では New Treasure 4 (Z会) をメイン教材として使用している。基本的には読解を目標とした授業展開であるが、2020年度の入試改革を念頭に生徒たちが学習内容に対して自分のコメントを英語で発信するような活動を、各単元で扱われているテーマに応じて必ず組み込むことにしている。パワーポイントを活用した黒板のICT化は準備に時間がかかるが成果は大きいと考えている」

その他 (TOEFL 指導について):

クネーブル「リスニングとグラマーのセクションは最初は易しい英文を用いた反復学習による問題演習を行っている。定期試験や単元テストでも TOEFL と同じフォーマットを用いて出題するように努めており、生徒たちが TOEFL の出題パターンに慣れるよう工夫をしている。また近年始めた X-reading (オンライン読書プログラム) を生徒たちにしっかりと取り組ませることによって英文読解速度の短縮化を図り、リーディングセクションの向上へもつなげていきたい。」 (記録 立命館慶祥中・高 中川 淳、編集:附属校教育研究・研修センター 羽田澄)